番組

おはなし　関　幸彦（中世歴史学者）

見物左衛門　野村　万蔵
深草祭

休憩　二〇分

三輪　中村　邦生
神遊

大日方　寛　國川　純　小寺　眞佐人
鵜澤　洋太郎　一噌　隆之

野村　万蔵

狩野了一　粟谷浩之　友枝雄人
友枝昭世　金子敬一郎　大村　定
友枝真也　内田成信　香川靖嗣
佐藤寛泰　長島　茂

終了予定四時四十五分頃

狂言『見物左衛門』深草祭

見物左衛門なる男が京都・深草の祭りを友人と一緒に見物しようと家を訪ねるが、友人はすでに出かけていたため、仕方なく祭礼の藤森神社に赴くという筋書き。飛耳長目（ひじちょうもく）（旺盛な好奇心で見聞を広げること）の世界よろしく、この演目の真骨頂は祭りでの世相・世情語りにある。道中での人混みの様子や屋台の様子などの情景描写を演者一人で語り尽くす話芸のパフォーマンス性がある。実況中継ながらの人々の表情や、祭りの雰囲気がコミカルに描写され居ながらにして時空を超えて中世人とその時代の気分が伝わってくる。「見物左衛門」という演目には、そうした独自の仕掛けがほどこされている。「太郎冠者」という一般男子に甚敵する「左衛門」名には、やはり中世という時代が埋め込まれているようだ。深草祭の賑やかな様子を身振り・手振りだけで、一人二役のように巧みに表現する。この演目も経験に裏打ちされた狂言師の所作には前述の「重習」と通底する。演者の野村万蔵の技量が光る。

複数の人物を配する一般的な狂言とは別に、この「一人狂言」では高度な力量が求められる。見方によっては後世の「落語」的世界とも通底する。

能『三輪』神遊

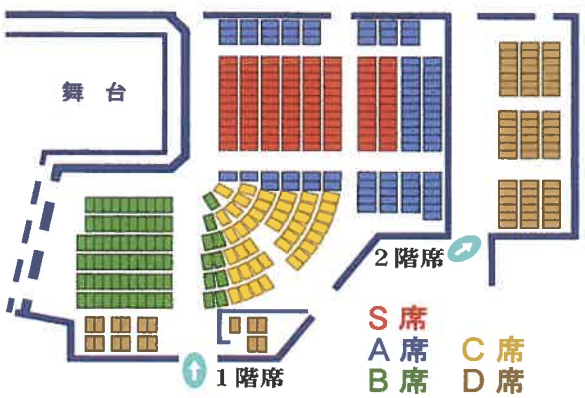
神仏の感化に材をとった演目は多い。この『三輪』もそうだ。三輪明神の神徳を加味しての変奏的作品といえる。ストーリーは以下となる。大和三輪山の麓に庵を結ぶ玄賓僧都（げんぴんそうず）のもとに、日々閼伽（あか）の水を供える里の女がいた。時節は秋、僧庵を訪れた女は「夜寒」のおり、僧の衣を所望する。玄賓は衣を与え住みかを尋ねると、三輪山の二本の杉のほとりと語り姿を消す。（中入）数日後、里の男が三輪明神に参詣すると神木に貸し与えた僧都の衣がかかっていたことを告げる。不思議を感じ三輪明神に訪れた僧は、枝の衣に金色の文字の神詠を見い出される。深更におよび「しるしの杉」の木陰から三輪明神が出現、かつての神婚説話さらには天照大神の岩戸神話などを語り、夜明けとともに消えるとの流れとなる。

高僧の玄賓に明神が罪業の救済を乞うとの流れがこの『三輪』の主題だろう。

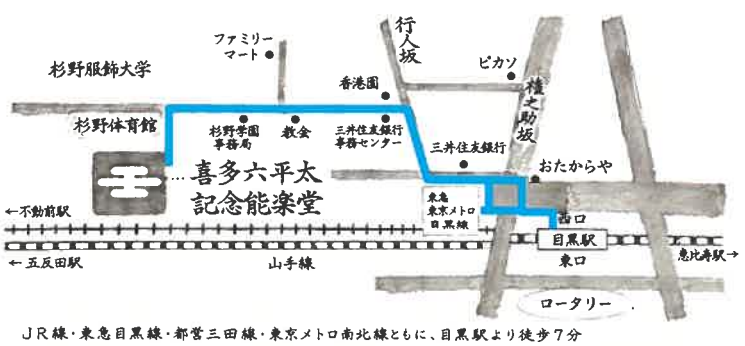
そこには神仏習合観の中世的展開があざやかに語られている。山自体を御神体とする三輪山は、奈良県桜井市の東方に位置する。円錐形の優美な山容は神がこもる山として古くから信仰された。『古事記』『日本書紀』にはその三輪山伝承が取り上げられており、この演目でも、最後の場面に味付けとして登場する。ワキの玄賓僧都は平安初期実在の僧で『元亨釈書（げんこうしゃくしょ）』によれば、平城・嵯峨天皇の尊崇を受け隠遁の高僧だった。鎌倉時代の説話集『古事談』にも「天下無双智者」と見えている。

三輪の神の化身が女性に転じて玄賓のもとへ訪い（おとない）、仏への帰依の証として閼伽の水を献ずるとの話柄をどう読み解くかがポイントだ。三輪の神は平安期以降、神仏習合思想の定着のなかで「明神」と号される。そこには「仏」に感化される日本の「神」の姿が具現化されていた。「権現」とともに「明神」の登場は院政期に本格化する信仰の形態とされている。まさに神仏習合の象徴的表現ということができる。

神楽的世界も取り入れながらの能楽世界の原点が圧縮されている流れには、日本人の精神性が貫流されており、その境地が所作にも織り込まれる『神遊』小書き（特別の演出）を施した、中村邦生の舞台の表現力に期待が高まる。



＊会場での撮影・録音・又飲食は堅くお断り致します



JR線・東急目黒線・都営三田線・東京メトロ南北線ともに、目黒駅より徒歩7分

十四世喜多六平太記念能楽堂

東京都品川区上大崎4-6-9
電話03(3491)8813

＊当能楽堂には、お客様用の駐車場は ございませんので 車でのご来場はご遠慮願います